

青年期の友人関係における山アラシ・ジレンマについて

- 高校生と大学生の調査を通して -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
発達・福祉臨床クラスター
泊里 実紀

本研究は、青年期の重要な友人関係における心理的距離をめぐる葛藤について分析した。この葛藤は、「山アラシ・ジレンマ」として捉えられ、このジレンマは、青年が自分と友人との適切な心理的距離をめぐる模索するときに生じるジレンマである。研究対象は高校生 231 名、大学生 275 名の計 506 名であった。

研究 1 では、(1)山アラシ・ジレンマの性差と年齢差からみた発達的变化について、(2) 山アラシ・ジレンマへの 3 つの心理的反応である「萎縮」「しがみつき」「見切り」の性差と年齢差の発達的变化について、(3) 山アラシ・ジレンマとそれに対する心理的反応の関係について明らかにすることを目的とした。研究 2 では、(1) 山アラシ・ジレンマ、心理的反応と携帯電話との関連について、(2) 山アラシ・ジレンマ、心理的反応と目的別に依じたメディアの使い分けとの関連について、(3) 山アラシ・ジレンマ、心理的反応と携帯メール依存尺度との関連について明らかにすることを目的とした。

その結果、研究 1 では、近づくことに対するジレンマ、離れることに対するジレンマには、それぞれ 2 つの心理的要因が抽出された。それらは、「対自的要因」によるジレンマと「対他的要因」によるジレンマとして整理された。ジレンマの性差については、近づくことに対するジレンマは、女性より男性の方が高くなり、離れることに対するジレンマは、男性より女性の方が高くなること示された。年齢差については、近づくことに対するジレンマは、大学生より高校生の方が高くなること示された。また、心理的反応である「萎縮」「しがみつき」「見切り」の性差については、「萎縮」と「しがみつき」は共通して、男性より女性の方が高くなったが、「見切り」は、女性より男性の方が高くなること示された。年齢差については、3 つの心理的反応は全て、大学生より高校生の方が高くなること示された。さらに、高校生、大学生共に、「対自的要因」による「山アラシ・ジレンマ」ほど、心理的反応に結びつきやすいということが明らかになった。

研究 2 では、まず、携帯電話の利用状況によって、山アラシ・ジレンマと心理的反応に変化が生じることが明らかになった。また、暇つぶしをするとき、「萎縮」は、対面よりもメールの方が高くなり、「しがみつき」は、対面より通話の方が高くなること示された。さらに、離れることに対するジレンマと 3 つの心理的反応はそれぞれ、携帯メール依存尺度と関連することが明らかになった。